

# CONTENTS

プロローグ	003
第一章	008
第二章	050
第三章	090
第三・五章	110
第四章	121
第五章	174
第五・五章	197
第六章	212
第七章	228
第七・五章	280
第八章	288
エピローグ	316

YANDERE KOOU NO TSUGAI SAMU  
IKOOTO NO MIGAMARI DE TOTSUJIDA  
HAZUGA TOROMAWA NI DEKIAI SREKASHITA

## プロローグ

「姫。どうか俺と結婚をしていただけませんか？」

色のある声が、吹き抜けの天井から吊るされたいくつものシャンデリアがフロアを照らすホールに響き渡った。

この日のためにと着飾った令嬢達が意中の相手の視線を誘導し、ダンスの誘いを今か今かと待ち望んでいるはずのホール。だが、今は、時が止まったかのように静まり返っている。

ダンスのための音楽家の演奏もピタリと止まってしまっていた。

夜会の出席者が見つめるのは、竜の棲む国ガルズアースの皇王だ。

残虐非道と恐れられる彼は妖精姫と名高い姫の目の前で跪き、手を差し出している。

注目を集める彼は、腕利きの技師が作った彫刻のような容姿を持つ美丈夫だ。

陶器のような白い肌を彩る真っ黒な髪。赤い瞳はルビーをはめ込んだように透き通っていた。

薄い唇も鼻梁も整った眉も、彼の全てが美しく、芸術品のようなだ。

程よく鍛えられているであろう肢体は、細部まで華やかな意匠や遊びが施された皇国の正装に包まれて隠されている。鍛えられているというのも、差し出された手に剣だこがあるため推し量ることができるにすぎない。

差し出されたのは男性らしい節の大きな手だ。彼に手を取られたいと夢見る女性は多いだろう。

この求婚が我が国、アルムヘイヤで行われたのではなく、自国で行われたのであれば彼の手は確実に取られたはずだ。

しかし、ここは皇国ではない。

何度も戦ってきた敵国である。

敵国に皇王自ら赴いてきたのだから、何か企んでいてもおかしくはない。

我が国以外と戦をした際、辺り一帯を焦土と化したのは誰でもなく皇王自身だ。

冷酷で残忍と囁かれる彼がどのようなことをしても対応できるように、準備してきた。

だというのに――

「皇王であるオデル様に求婚されるなんて、夢にも思っていないませんでしたわ」

求婚された姫は意識して口角を上げ、薄い空色の瞳を細めた。

ゆったりと首を傾げれば、白色の絹のような髪が揺れる。

困ったように笑う彼女の対応は王族として完璧な振る舞いだ。

「えー！ 結婚!？」

「結婚！」

「フロージェが」

「結婚しちゃう!？」

彼女の周りを漂っていた手のひらサイズの妖精達が、一斉に騒ぎ出す。

フロージェはこの国で唯一妖精の祝福を受けた女性だ。

そのため、彼女の周りにはいつも妖精が飛び交っている。

（まあわたしは妖精姫の影武者で、本来なら妖精からは嫌われているんだけど。フロージェが頼めばそれっぽく見えるようにはなるのよね）

妖精から嫌われている彼女は妖精姫ではない。本当の妖精姫は別にいる。

皇王から求婚を受けた影武者――シルディア・アルムヘイヤは妖精姫の双子の姉だ。

妖精姫である双子の妹を守るため、こうして入れ替わって夜会に出席している。

「求婚してはいけませんでしたか？」

「い、いえ。そのようなことは……。ですが、誰かとお間違えでは？」

「いいえ。貴女です。私が皇妃にと望む唯一の女性です」

きっぱりと言いつけられては返す言葉もない。

（フロージェに求婚しているつもりみたいね。でも、わたしと見分けがつかないなんて、本当に好きなのかしら？）

じっと見つめる赤い瞳の奥にとす黒い感情が渦巻いていることに気付かぬフリをして、シルディアは柔らかな笑みを浮かべた。

「まあ。お上手ですこと。わたくしと結婚したいのであれば、まずは国王陛下にお話されてはいかがでしょう？」

「はやる気持ちを抑えられず思わず求婚してしまいました。申し訳ありません。姫」

「いえ。分かってくださればいいんです」

立ち上がった皇王——オデル・ガルズアースは整った眉を下げ、改めてシルディアに手を差し出した。  
てきた。

「返事は国王からお伺いします。なので、今は、一曲踊っていただけませんか？」  
「ええ。それでしたらよろこんで」

オデルの手にシルディアが手を乗せると壊れ物を触るかのようによく握り返された。

二人がホールの中心へ移動する。固唾を呑んで見守っていた夜会の出席者達が、二人の邪魔をしないよう道を空けた。

奏でられる音楽と共に、ステップを踏む。

(とても踊りやすい。流石、皇王ね)

今まで踊った誰よりもダンスが上手い。

長年一緒にいると錯覚しそうなほど、息がぴったり合う。

「何を考えているのですか？」

上から降ってきた少し拗ねたような声に、思わず緩んでいた口角を引き締める。

「気になりますか？」

「もちろん。貴女に関することならなんでも気になります」

「大げさですわ。実は、今まで踊ってきた中で一番踊りやすいと考えていましたの」

そう口にした瞬間。

密着している体がさらに引き寄せられ、腰に回る腕に力が籠められる。

痛みを感じるほどのそれに抗議しようとシルディアが彼の顔を見上げると、捕食者のような赤が黒髪から覗く。

仄暗い闇を抱えたルビーと同じ色の瞳が、より一層闇に包まれた気がした。

人の多いホールは暖かいはずだが、うすら寒いような感覚に陥ってしまう。

足元から這い上がってくるような寒気に、シルディアはぞっとオデルを見つめ返した。

しかし視線が絡んだオデルには、息を呑むような冷たさも、残酷さも見当たらない。

(気のせい……?)

何とも言えない感覚に囚われながら、シルディアはオデルとのダンスを続けた。

# 第一章

薄暗く少し湿った地下の自室で、シルディアは寝台へと枕を投げつけた。

拍子に寝台が軋み、嫌な音を立てる。

しかしシルディアは気にする様子もなく、眉をつり上げた。

「いきなり求婚してくるなんて、ガルズアースの皇王は何を考えているのよ」

悶々もんもんとこみ上げる怒りに、シルディアは肩を震わせる。

「そもそも好きならちゃんと言わしとフロージェを見分けなさいよ」

妖精姫の影武者として、フロージェになりきれている証拠と言われてしまえばそれまでだが、求婚となれば話は別だ。

双子を見分けられないとあっては、フロージェに対する好意も疑ってしまう。

「……皇王に好意があるうがなからうが、皇国に行けと命じられたわたしには関係のない話ね。嫁ぐのが影武者わたくしの役目だもの」

自室に戻ってくる前、国王から勅命が下った。

妖精姫を皇国へ渡すわけにはいかない。だから代わりになれ、と。

シルディアは大きなため息をついて、用意されたトランクケースに荷物を詰めていく。

人目につかないよう地下にひっそりと作られたシルディアの部屋は手狭で、小さなトランクケース



に持ち出したい物も、思い出も簡単に詰まってしまった。

予想以上に少ない荷物に、シルディアは思わず苦い笑いを零す。

(無意識だったけど、これじゃあいつ消えてもいいように準備してたみたい)

後ろから慌ただしいヒールの音が聞こえ、シルディアは反射的にトランクケースを閉じる。

緩んだ頬をそのままに振り返ると、シルディアそっくりの顔が飛びこんできた。

可愛らしいドレスに身を包んだ彼女——フロージェは目尻に大粒の涙を溜め、ぎゅうぎゅうと抱きついでくる。

「お姉様！ 本当に行ってしまうのですか!？」

「ええ」

「どうして？ こんなの間違ってる！ わたくしの代わりにお姉様が嫁ぐなんて……リスクが高すぎるわ」

もし替え玉がバレてしまえば、シルディアの首が飛び、王国の立場も悪くなってしまうだろう。だが、入れ替わり以外に妖精姫を守る術がないのも事実だ。

「そうね。でもフロージェが国外へ嫁ぐなんて、現実的ではないと分かっているでしょう？」

フロージェの頬を両手で包む。

そっと上を向かせると、むすっとしたフロージェと目が合った。

唇を尖らせる彼女を微笑ましく思っていると、さらに眉を釣り上げられた。

「わたくし、絶対にお姉様を取り返してみせるから!」

「その気持ちは嬉しいけれど、そんなことを言っては駄目よ。フロージェにはフロージェの役割があるでしょう？ ほら、妖精達が困っているわよ」

今もフロージェの柔らかな白髪には小さな妖精達がくっついている。

妖精達は彼女を気遣ってかその極小の手で頭を撫でていた。励ましているつもりなのだろう。

これこそ彼女が妖精姫である所以だ。

フロージェが悲しめば妖精も悲しむ。フロージェが喜べば妖精も喜ぶ。

彼女が望めば、嫌いな人間、国、世界、全てが妖精によって滅ぼされるだろう。

そのため、彼女は丁重に扱われる。

妖精に愛され、祝福される存在。それが妖精の愛し子だ。

妖精達の心配に、フロージェは瞬く間に怒りを引込めた。彼女はすぐに笑みを浮かべ妖精達へお礼を口にする。

もし怒りのまま何かを口にすれば、妖精は彼女と同調して暴れだすだろう。

(妖精姫も大変ね)

シルディアは妖精と戯れるフロージェから離れる。

フロージェと妖精達を微笑ましく眺めていると、またヒールの音が聞こえてきた。

(あら？ 今日に来客が多いわね)

不思議に思いながらシルディアは扉へと目を向け、控えめに響いたノック音に返事をする。するとこれでもかと眉間に皺を寄せたシルディア達の母——王妃が入室した。

王妃はシルディアとフロージェを視界に入ると、安堵したように微笑んだ。そして二人を抱きしめる。

「わたくしにもっと力があれば……ごめんなさい、シルディア」  
首元に回った腕に力がこもった。

王妃の声が震えているのは気のせいではないだろう。

抱きしめられた二人は目を瞬かせ、王妃の背中へと手を回す。

「お母様が生かしてくれたから、わたしはここにいます。謝罪なんて必要ありません」

王妃は責任を感じているのだろう。なんとと言ってもアルムヘイヤ王国では双子は禁忌とされている。とりわけ姉妹の双子が忌み嫌われ、姉に至っては存在すら許されない。

それは建国神話にまつわる価値観だ。

本来であればシルディアは生まれ落ちた瞬間に死が確定していた。妹のように妖精に祝福されれば違っていたかもしれない。だがそのような奇跡は起こらず、予定通りシルディアは間引かれるはずだった。

しかし他国の姫であった王妃はそれを許さなかった。

王妃は反対を押し切り、国王から生まれていないことにされたシルディアを慈しみ育ててくれた。

もし王妃が同じアルムヘイヤの貴族出身であったなら、今ここにシルディアはいない。教育を施してくれた王妃は、紛れもなく母だった。

「わたしはガルズアースでもしぶとく生きていきますから！」

「っ、わたくしのシルディア……どうか無事で……」

王妃の口から零れ出た声色は、初めて聞くものだ。

敵国へ娘を嫁がせなければならぬ王妃の心労は計り知れない。

「もちろんです」

シルディアは王妃の背に回る腕に力を込める。

本来なら、敵国に嫁ぐと聞けば絶望してしまうのだろう。

嫁とは名ばかりの人質なのだから当たり前だ。

しかし、シルディアは恐怖を微塵も感じていなかった。むしろ小さな怒りさえ覚えていた。

「それに、双子を見分けられない男にフロージェは渡せないもの」

「お姉様……！」

別れを惜しむ抱擁は、侍女からガルズアース皇王が待っていると声をかけられるまで続いた。

フロージェに扮したシルディアは、汗の滲む手のひらを気にしないフリをしながら、皇王の待つ応接間へと足を進めた。

王妃に連れられ部屋へと近づくにつれて、廊下が騒がしくなっていく。

不思議に思っていると、衛兵の奥に艶やかな黒髪が見えた。

それはシルディアを視界に入ると、衛兵を押しつけて一目散に向かってきた。

大型大きながらの動きにシルディアは目を丸くする。

(皇王ってこんな顔をする人だったっけ……?)

一瞬の疑問は、オデルに抱きすくめられてどこかへと飛んでいってしまった。

「会いたかった」

「っ、離してください」

シルディアは身じろぎをするが、力強く抱きしめられているため身動きが取れない。

王妃が咎めようと口を開いた瞬間、オデルが強気に笑う。

「それじゃあ俺達の家に帰ろうか」

「え？」

「王妃殿下。それでは御前失礼いたします。この娘は俺が責任を持って幸せにしますので」

そう言うやいなや、瞬く間に景色が変わった。同時にごとりと小さなトランクケースが床に転がる。

見慣れない室内にシルディアは目を瞬かせていると、オデルがそっと離れた。

「ようこそ。ガルズアースへ」

「……え？」

「ここは俺と君の愛の巣だよ」

オデルはにこにこ笑みを浮かべているが、シルディアは彼の言葉の意味を咀嚼できずにいた。

「どういうこと……? ガルズアース……?」

「俺の魔法で城に連れてきたんだ」

「どうして……」

困惑のままオデルから距離を取ろうと後ろを振り返った直後。

伸びてきた手に捕まった。

「どうして? 決まっているだろ」

耳元に彼の吐息があたり、シルディアは身を固まらせてしまう。

背中に伝う冷や汗にすら気がつかないほど、後ろの男の体温にしか目が向けられない。

「君はお嫁さんだから。改めて君の名前を教えてほしい」

「フロージェ・アルムヘイヤですわ」

「……本当に?」

「はい」

きっぱりと言い切ると、オデルの眉間に皺が寄った。

「本当の名前を教えてほしい」

「ですから、わたくしはフロージェだと申しております」

「嘘つき。君はフロージェではないだろう?」

「っ、お戯れを」

そう口を開いた瞬間。オデルの大きな手がシルディアの顎を掴んだ。

「よく聞こえなかったな。ねえ君の名前は?」

「フロージェですわ」

「ふうん。あくまでも妖精姫だと称するのか」



視界の端でキラキラと輝く赤い瞳に熱が籠った。  
その熱に嫌な予感が脳裏を掠めたシルディアが抗議の声を上げる。

「な、なにをっ——」

無防備に晒された首元にオデルが口を寄せ、かぶりついた。  
鋭い痛みがシルディアが顔を歪める。

「ああ、やっぱり、君の白い肌には真っ赤な血がよく似合う。ぼくの可愛い可愛いっがい」  
恍惚とした声を聞きながら、シルディアは意識を手放した。

目を覚ますと、知らない天蓋が見えた。

小さな女の子が憧れるような、レースがふんだんに使われたものだ。

どうやら寝台に寝かされていたらしく、シルディアは温かな布団に包まれている。

（あれ？ わたし……？）

まどろんでいた意識が一気に覚醒する。

シルディアは着替えた覚えも、寝室に案内された覚えもない。

周りを確認するため横を向き——隣で浅い呼吸を繰り返す美しい男に、初めて気が付いた。

十人いれば十人が振り返り見惚れてしまうほどの濃艶を醸し出している男が今、シルディアと同じ  
寝台で横になっている。

真っ黒な絹のような髪。薄い唇。頬の輪郭まで流麗な彼は、ガルズアース皇国の皇王である。十分

な睡眠を取れていないのか、形のいいはずの目元には酷いクマができていた。

深く刻まれたそれは、彼の苦勞を物語っているようで少し胸が痛む。

「痛っ、う」

痛々しいそれに手を伸ばそうとして、首元が痛んだ。

心当たりは一つ。

(わたし、<sup>ミイっ</sup>皇王に嘯まれて……)

「おはよう。俺の<sup>しらゆり</sup>白百合」

痛みに呻いた声を聞かれたのだろう。

今まで寝ていたとは思えないほどずっと目覚めたオデルのとりけるような笑顔向けられた。この笑みだけ見れば、彼がシルディアを嘯むような野蛮な性格だとは誰も信じられないだろう。

オデルからは敵意が一切感じられない。

むしろ、溢れんばかりの恋情が表れている。

「白百合……？」

「君が名前を覚えてくれないからだろう？」

「だから、わたくしはフロージェだと言っているではありませんか」

勢いよく起き上がる。

どくどくと嫌な音を立てる心臓を無視して、シルディアは取り繕う。

(やっぱり、わたしとフロージェの入れ替わりに気が付いているのね。でも、わたしだって正体がバ

レるわけにはいかない)

妖精姫の名を傷つけないよう細心の注意を払って、シルディアは優雅に微笑んだ。

フロージェさながらの笑みに、オデルは眉を下げる。

「困ったな。うーん、そうだ。嘘をつく口は縫い付けてしまおうか。それとも喉を潰す？ そうすれば、君のその鈴の音のような美しい声は永遠にぼくのものだからね」

「そんな……お戯れを」

「君はそればかりだねえ。本当に戯れか、試してみる？」

起き上がったオデルがシルディアの喉に手をかける。

力を込められると簡単にシルディアの命は潰えるだろう。

生殺与奪の権を握られている感覚。

悲鳴が出なかったことを褒めたいほど、張り詰めた空気に包まれている。

しかし、シルディアはせめてもの矜持に<sup>きょうじ</sup>笑顔を絶やすことはしなかった。

そんな心情を探るように赤色の瞳がシルディアを捕らえて離さない。

ほんの少し、首を掴む手に力を込められる。

「っ」

シルディアの眉が動いたのを見逃さなかったのだろう。オデルは満足そうに口角を上げた。

「誰が優位に立っているのか、理解できた？ 君を殺すのはとても容易いんだ。自分の立場をよく考え直して？」

「……はい。皇王陛下」

「だめだめ。ぼく達はもう夫婦なんだ。名前で呼んで」

「オデル様……?」

「様はいらない」

「お、オデル」

「よくできました」

首を握られている状況で拒否できるほど、シルディアの知るフロージェは強くない。

フロージェは心優しい普通の女の子だ。皇王に手を上げたりするような野蛮な行動はしない。

そのためシルディアが影武者である以上、行動は慎まなければならぬのだ。

（我慢するのよ。わたしは今、品行方正なフロージェなの。今すぐ掴み返してやりたいけど、やってはいけないわ）

オデルは反撃できないと高を括っているのか、いまだ手を離す素振りが無い。

それどころかシルディアを品定めするかのように眺めている。

なぜだかそれがシルディアの癢に障った。

「オデル。そろそろこの手を離していただけませんか?」

「やっぱりいいね」

（我慢よ。我慢）

にこにこ笑うオデルは、清々しいほどにシルディアの話を聞いていない。

「聞いていらっしやいますか? オデル?」

「君の可愛らしい唇から紡がれる言葉はずっと聞いていたくなるねえ」

（いや、話通じてないんだけど。これが皇王? それこそ嘘でしょって、いけない。つい口に出そうに……我慢よ、シルディア。今わたしはフロージェなの。あの子はこんな文句言わない）

一文字一文字丁寧に発音し、シルディアはオデルに問いかける。

「あの、言葉は通じていますでしょうか? オデルの言葉は理解できるのですが、会話になっていないと言いますか……」

「困惑する顔もまた可愛いね。白百合も似合うけど、薔薇も似合いそう」

（——ああもう）

いくら声をかけても噛み合わない会話に、シルディアはとうとう我慢の限界を迎えてしまった。

衝動的に自身の首に添えられている手を掴み返す。

驚きに目を見開き、やっとシルディアを映したその赤い瞳を睨んだ。

「少しは人の話を聞きなさい!」

シルディアは勢いよくオデルを押し倒し、両腕を押さえつける。

白髪がカーテンのように寝台へと流れるが気にしない。

呆気に取られるオデルに気をよくしたシルディアは淑女らしさの欠片もない笑みを浮かべた。

「やっとわたしを見た。白百合、白百合って言うなら、少しは気を配ってほしいものね?」

「き、みは……」

「わたし？ わたしは……妖精姫フロージェ、です……」

名乗ろうとして我に返ったシルディアは全身の血の気が引いていくのを感じた。

視線を彷徨<sup>さまよ</sup>わせながら内心やかしたと暴れまわる。

（や、やっちゃった……。だ、だって全然わたしのこと見ないから、ってそうじゃなくて）

背中伝う冷や汗と、自身がオデルを組み敷いている状況に頭がくらくらとしてしまい、思考が回らない。

今にも泣きだしそうなシルディアは気が付いていなかった。

彼女の下でオデルが肩を揺らしていることに。

「ぶっ」

「へ？」

「今の、完全に本名を口に出す場面だったでしょ。それなのに、あははっ！ 腹痛<sup>い</sup>え！」

「ちよっ、そんなに笑うことないじゃない！」

オデルの砕けきった口調に、思わず抗議の言葉が口から漏れた。

この口調がきくと彼本来のものなのだろう。

等身大の青年らしい喋り方に、シルディアの心臓が跳ねる。

求婚時や皇王として振舞う時は口調を作っているのだろう。

しかし、打ちつけていない相手にこのような姿を見せるほど、オデルは甘くないはずだ。

（つまりわたしは、心を許されている……？）

行き着いた答えに、シルディアの頬に熱が集まった。

頬に集まった熱はきつと羞恥<sup>しゆうち</sup>心だと意識を紛らわせていると、オデルが笑みを浮かべたまま、こてんと首を傾げる。

「気の強い君も大歓迎だけど……この体勢はいささか男の沽券<sup>こけん</sup>に関わると思わない？」

「？ きゃっ！」

シルディアは全体重をかけて両手首を押さえつけていたというのに、いとも簡単に拘束から逃れられてしまった。

垂れ下がっていた白髪が、今度はシートに散らばる。

オデルが妖艶な微笑みを浮かべ、シルディアを見下ろす。

「形勢逆転だね？」

その言葉に答えるようシルディアは強気に笑う。

「それで？ ここからどうするつもり？ 確かにわたしは嫁いできたけれど、まだ正式に婚姻を結んだわけじゃない」

「何が言いたいのか？」

「皇国で一番重要視されるのは、地位でも、血筋でもない。婚姻を結ぶ相手が【つがい】かどうか。そうでしょう？」

「君は勉強熱心なんだね。確かにつがいでなければ皇妃にはなれないんだ」

優しく頭を撫でられてしまい、熱が冷めていたシルディアの顔にまた羞恥が宿る。

(フロージェ以外に褒められたの、いつぶりかしら)

シルディアは、フロージェになるためどんな教養でも貪欲に学んできた。王妃はとても厳しかったがフロージェのためだと思えば耐えられた。

そもそもシルディアが表舞台に立つときはフロージェとしてであり、全ての賞賛はフロージェに向けられたものだ。

そのため十八年生きてきた中で他人からシルディアとして褒められた覚えはない。

(あら、でも一度だけ……)

「誰のこと考えているのかな？」

気が付けば、あと少しで唇が触れる距離にオデルの顔があった。

「っ!？」

「ねえ。今純潔を奪われるのと、名前を教えるの、どっちがいい？」

「え? ……え?」

「あれ。聞こえなかった？」

「い、いや、聞こえてるけど……」

妖美な笑みを浮かべるオデルと目が合い、シルディアは背筋が凍った。

顔は笑っているのに目は笑っていない。

(本気だ。この人は、絶対やる)

「選ばせてあげてるんだから、早く決めてね? 俺はどちらでも構わないから」

そう言うオデルは、噛み跡の付いた首元に唇を寄せた。

何をするのかと身構えていれば、ぬるりと生温かい何か噛み跡をなぞるように這う。それが彼の舌だと気が付き、咄嗟に自身の名を口にする。

「シルディア。わたしの名前は、シルディア・アルムヘイヤ。フロージェの双子の姉」

このままでは本当に純潔を散らされてしまう焦りから、思わず口から出てしまった。

「シルディア。そうか、シルディアか。いい名だ」

オデルは起き上がり、口の中で何度もシルディアの名を繰り返す。

その様子に安堵したからか、シルディアの目が潤んだ。

シルディアよりも先に、彼女の涙が付いたオデルは恍惚に顔を歪めた。

「まいったな。泣かせるつもりはなかったんだが、その顔もそその」

「ひゃっ!？」

舌で涙を舐め取られ、シルディアの口から変な声が漏れる。

赤色の瞳が三日月形に歪み、唇同士が重なる寸前。

「っ! 調子に乗るな!」

シルディアの頭突きがオデルの額に吸い寄せられ、盛大に決まった。

「痛ってえ!」

「変なことをしようとするからよ。自業自得だわ」

「それはそうだな」

オデルは呆れたようにため息をつき、シルディアの上から退く。

がしがしと頭を掻くその姿は、先ほどの冷たい雰囲気とはかけ離れていた。

(訳が分からないわ。コロコロと顔が変わりすぎて……)

シルディアの首を噛んだ本人だとは到底思えないほど、雰囲気が違う。

飄々として思えるかと思えば、重苦しい執着を向けられる。はたまた年相応の青年の顔を覗かせたか

と思うと、今度は皇王として威厳に満ちた顔を見せてくる。

(……どれが本当の彼なの?)

探るようにオデルを見ていると、寝台から降りた彼は思い出したように振り返った。

「お腹空いたでしょ。ちょっと早いけど朝食にしよう」

オデルの言葉に、シルディアの腹の虫が返事をしてしまう。

シルディアは羞恥で頬を染め、誤魔化すように頷いて立ち上がった。

「お手をどうぞ」

「ありがとう」

差し出された手に条件反射で自分のそれを重ねてしまう。

わずかに肩を震わせたオデルにシルディアははたと気がつく。

しかし手を引込めることはできず、彼にエスコートされてリビングルームへと通される。

寝室の隣にリビングルームがある珍しい造りだ。

冬の寒さを感じさせない室内の左手を見れば、暖炉が目に入った。

シルディアが寝ていた間もずっと暖め続けていたのだろう。暖炉には火が灯っていた。

暖炉の前には猫足のローテーブルとソファアが置かれており、暖を取れるようになっていた。

ソファアの奥には貴族の食堂でよく見る多人数用のテーブルではなく、こじんまりとした長方形のテーブルが置かれていた。

壁側には椅子が二つ仲良く並べられている。

椅子の置かれた壁側にあるのは隣の部屋へ続くアーチだ。

シルディアの目が正しければ、アーチの奥にはかまどが備えられている。

(こんなところに厨房……?)

アーチのすぐ右隣には扉があるが、本来いるはずの者がいない。

(おかしい。護衛や侍女はどこに……?)

控えているはずの侍女や護衛すらいないリビングに違和感を覚えながらも、オデルに椅子を引かれる。エスコートのままシルディアは椅子へと腰かけた。

テーブルへ目を落とすと、繊細なレースがあしらわれた真つ白なテーブルクロスが広がっていた。

その上にはシルディア好みの可愛い花瓶に一輪の白百合が飾られている。

「いい子で待ってて」

「へ？」

シルディアの頭を一撫でしたオデルは厨房へと足を向けた。

何かを作る音がしたかと思うと、彼はものの数分で戻ってきた。ワゴンと共に。

オデルとワゴンの組み合わせにぎよっとしていると、テーブルの上に食事が並べられる。湯気の立つスープ。ほかほかのパンにみずみずしい野菜とソースの絡まった肉が挟まり、食欲をそそる匂いが立ち込める。

食事が並ぶすぐ横に、白を基調にしたティーセットが置かれた。並べられた食器はシンプルなものだった。

(フロージェは可愛らしい物を好む。なのにこの上品なティーカップはわたしの好みの……。どうして？ フロージェの好みが分からなかったから取り敢えず無難な物を用意した……。?)

水色の百合が描かれたソーサーに、紅茶の入ったティーカップが置かれる。

給仕をしたオデルは、当たり前のようにシルディアの隣に腰かけた。

「食べようか」

「厨房に料理人がいるのね。でも、皇王自ら紅茶を淹れるなんて、ありえない」

「大丈夫。目の前に給仕をしている皇王がいるんだから、ありえないことじゃないよ」

当たり前のように言ったオデルは、自身が持って来た食事に手を付ける。

躊躇ためらいなく食べる彼に、毒の心配はないと判断したシルディアも食事に手を付けた。

食事が終わり、片付けを始めるオデルにシルディアは声をかける。

「一ついい？」

「もちろん。シルディアの質問にならなくても答えるよ」

「じゃあ遠慮なく。侍女と護衛は？ 見当たらないけどどこにいるの？」

「この部屋にはいないよ。あ、もちろん扉の前には見張りが立っている。でも、室内には立ち入りを許可していないんだ」

「なんで？」

「シルディアの姿を他の奴に見られたくないからに決まってるだろう？」

当たり前だと言わんばかりの口調に、シルディアは目をぱちくりさせた。

オデルがパンからはみ出たソースを自身の舌で舐め取る様を見つめる。

やっとの思いで口から出たのは、ありきたりな疑問だ。

「それだけ？」

「それだけ」

「意味がわからない！」

オデルはきよとんと首を傾げる。まるでシルディアが叫んだ理由がわからないと言わんばかりだ。

「何か問題が？」

「いや、問題まみれでしょう！ あなたはっ」

「あなたではなくオデルだ」

シルディアはそこに突っ込むのかと考えつつ息をついた。

頭に上った血を降ろさなければと努めて冷静に呟く。

「オデルは皇王でしょ？ 安全を考えたら護衛はつけないと」

「なぜ？」

「な、なぜって……皇族は守られるもので……」

一瞬目を見開いたオデルだったが、すぐに柔らかな表情に変わった。

「大丈夫。俺は竜族の長おき。竜王だ。シルディアも知っているだろう？」

「そ、それは、もちろん知っているわ」

「この国で俺より強い者はいない。安心して」

幼子をあやすような微笑みでオデルはシルディアの頭を撫でる。

純粹な強さという面でオデルの右に出る者がいないのは確かだろう。

（わたしが七歳の頃、皇国と他国との戦で指揮を執ったのはオデルだったはず。わずか十四で最前線

に出て勝利を勝ち取った……。それが本当なら強さは確かでしょうね）

シルディアが黙り込んでいると、オデルが魅力的な提案を口にする。

「朝食も食べ終わったことだし、他の部屋を案内しよう」

「！ いいの？」

「もちろん。シルディアが好きに出入りしていい場所だけになると、いいかい？」

気遣うような視線がくすぐたくて、シルディアは口を噤つぶんだ。

人に気遣われるという行為が心地のよいものだとして初めて知った。

（命令すればいいだけなのに、わたしの意思を確認するなんて……非効率だわ。でも、嫌じゃない）

シルディアが黙り込んだことに眉を蹙ひそめたオデルがぼそりと呟く。

「やっぱり不満だよな。城内にいる者達を全員排除すれば……」

「どうしてそうなるの!？」

「え？ 俺の百合をとこの馬の骨かもわからない男に見せるわけにはいかないからね」

「わたしが城内を歩くためにそこまでする!？ 普通に案内できないの!？」

「シルディアを誰にも見られたくないからな」

「減るものじゃないでしょ」

「減る。確実に」

「ちなみに、わたしを見た人はどうなるの？」

シルディアの問いに、オデルはにっこりと綺麗な笑顔を浮かべた。

「知りたい？」

「そうね」

「まずシルディアを見たその瞳を抉えぐり出し、声を聞いた耳をそぎ落とす」

「ちょ、ちょっと待って。やりすぎだわ」

「？」

心底何が悪いのか理解できないと首を傾げられる。

目を瞠みはったシルディアは立ち上がり、ワゴンに食器を並べるオデルの両頬に手を添えた。

「わたしは、そんなことしてほしくない」

「……」

「今、オデルがわたしを外に出すことに不安を感じるなら、わたしは外に出なくてもかまわない。わ

たしのせいで人が死ぬのはごめんよ」

「……シルディアは外に出たい？」

「出たいか出たくないかと言われれば、出たいわ。でも、わたしのせいで誰かが傷つくのは……」  
「わかった」

説得に成功しシルディアはほっと胸を撫でおろした。

オデルの頬から手を離そうとするが、手を取られてしまった。

手にすり寄る彼に驚き目を向ければ、楽しげなルビー色の瞳と目が合った。

絹のような黒い髪が少しくすぐったい、とシルディアは現実逃避をした。

だが、それも数秒許されただけで、シルディアの意識はすぐにオデルへと縫い付けられる。

指一つ一つに口づけをするオデルを止めることもできず、なすがままになっている。

「ちょっと、や、ひゃう。痛っ」

それは五本の指全てに口づけをし、シルディアが終わりかと肩の力を抜いた瞬間だった。

オデルはあろうことか薬指に噛みついたので。

血は出なかったが、薬指の根本にはくっきりと歯形が刻まれてしまった。

「よし」

「っ、よしじゃない!」

振りかぶった手を簡単に受け止められ、シルディアは唇を噛んだ。

オデルの指先がシルディアの唇をなぞり、優しく唇を開く。

「綺麗な唇なんだから、噛んだら駄目だよ」

「誰のせいだっ……!」

「俺のせいだね」

「理解してるのなら」

「ごめんね? でも、俺のものでっ印はつけとかないと」

「はあー。ここで論争しても無駄ね。部屋、案内してくれるんでしょ?」

「うん。少し待ってて」

そう言い残し、オデルは食器を載せたワゴンを厨房に戻しに行く。

(話を通じる時と通じない時との差が激しすぎるわ)

シルディアは彼の背を見ながら、湧いて出た疑問に首を傾げた。

「寝室の隣はシルディアのドレスルーム。似合いそうなドレスを仕立てておいた」

(いつ採寸されたんだろ……?)

「ここは書庫だよ。シルディアが退屈しないように古今東西問わず本を集めたんだ」

(わたし、読書が趣味だって誰かに言ったことあったっけ……?)

「書庫の隣は俺の執務室。書庫とリビングルームから来ることが可能だ。でも、ここは色んな者が入りするから、来たい時は必ずノックしてね。執務室の奥にも書庫はあるけど、資料ばかりだから面白くないかも」

(執務室を通らないと廊下には出れないようになってるのね)

流れるように部屋を案内したオデルは、執務室の端で満足そうにしている。

一方のシルディアは、部屋の間取りに頭を悩ませていた。

落ち着いた雰囲気執務室だが、シルディアの内心は穏やかではない。

(どう転んでもわたしを外に出す気がないのね。オデルが公務をしている間は城内を動けると思っていたけれど、この間取りじゃ無理だわ)

「どうかな？ シルディアが来るまでに造らせたんだ。気に入ってくれると嬉しいな」

寝室から書庫、書庫から執務室。執務室からリビングルーム、リビングルームから寝室と全て繋がっている。

それは、シルディアを外に出さないために造られたのだと悟るには十分すぎた。

「扉の外には見張りがちゃんとしているのよね？」

「そうだね。俺はいらないう言っているんだが、騎士団長がうるさくて仕方なく」

そう言ったオデルは肩をすくめた。

不意だと言わんばかりの行動にシルディアは少し笑みが浮かんだ。

「それにしても、他国の王族を執務室に連れ入るのはどうかと思うわ」

「大丈夫。半年後には結婚するんだ。問題ないよ」

皇国における皇族の結婚は、結婚しようとするすぐに婚姻が結ばれるわけではない。

準備期間が必要になるのが一般的だ。

半年から一年かけて、貴い身分にふさわしい式になるよう準備をする必要があった。

すべては、皇族の力を見せつけるためだ。

しかし、皇国で一番重要視されるものは、準備期間といった一般的なものではないことを、シルディアは知っている。

「本当にそう思っているの？」

「アルムヘイヤは君を差し出したんだ。結婚しないという選択肢はないと思うけどね」

「……わたしはオデルの【つがい】ではないわ」

ガルズアース皇国の皇族は皆、竜族だ。

彼らはつがいという独自の感性を持ち、生涯にただ一人愛する少し変わった一族だ。

つがいは同じ竜族から選ばれることもあれば、他国の貴い身分の人間や平民の人間であったり、はたまた重人であったりと様々だ。

そして、つがいではない者に対する好感度はマイナスへ振り切っているのが一般的だと書物に記されている。

つがいではないシルディアも首を嘯まれたのだからその書物は正確なのだろう。

(つがいでない者との結婚は認められないという、特殊な制度があるから、きつとわたしとは結婚できない)

皇族であるオデルは、自身のつがいを見つけ娶らなければならない。

そのため、シルディアとは婚姻を結べない。

(きつとフロージェがつがいったのね。わたしでは代わりに成りえない。でも、気になるのは……私に向けられる感情)

オデルから向けられる視線には憎悪や嫌忌の感情は見られない。

むしろ赤色の瞳の奥に燦(きら)めるのは――

(愛情。いえ、もっと狂気に満ちた重い愛情だわ。狂愛とでもいえばいいかしら?)

じっと見つめ過ぎたのか、視線に気が付いたオデルが恋する乙女のように顔をほころばせる。

絶世の美女顔負けの艶を見せつけられてしまえば、オデルがシルディアを心から愛していると疑いようもない。

だが裏を返せば、疑われないようにしなければならぬ理由があるということだ。

(かといって、皇王がこれほどの愛情を向ける理由がそうあるとは思えないわね)

「どうした? そんなに見つめられると照れてしまう」

「冗談でしょ。ずっと顔色一つ変わらないじゃない」

「皇族に生まれた者として、顔色ぐらいコントロールできるさ」

「行き過ぎだわ。それで、オデル。公務はどうしたの? 」

「俺が一日抜けたぐらいで回らなくなるような執務はしていないさ」

言い切ったオデルに、シルディアは思わず眉を吊り上げた。

「つまり、サボり!? 皇王が!? ありえない。今すぐ公務に戻らないと」

「サボりだなんて酷いな」

「事実でしょ! 」

「俺はシルディアの傍(そば)にいたい。俺はシルディアさえ隣にいればそれでいいのにな。あ、公務をしてほしいって言うなら、皇王の世継ぎを作ることでも大事な仕事だと思っよう? 」

「っ! 」

「……流石にシルディアに嫌われそうだし、やめとこうかって、ん? 真っ赤になって可愛い。なに? 想像した? 」

「うるさい」

赤く染まった顔を見せないよう、シルディアは顔ごと逸らす。

隣で忍び笑いが聞こえたが気にしない。

(マイペースに見せかけて話の主導権を握るのが上手い)

シルディアは起床してから今に至るまで振り回されっぱなしだ。

けっして気を許しているわけではないというのに、オデルのペースに呑まれている。

「何を考えているのか、手に取るように分かるね。俺に主導権を握られるのがそんなに嫌? 」

「当たり前じゃない」

「気が強いところも可愛いな。あ、じゃあ主導権を奪い返してみたら? 案外簡単かもしれないよ」

「わたしが奪えるとは少しも思っていないでしょ」

「うん」

あっさりと頷かれ、シルディアは頭を抱えなくなった。

駆け引きはできないと侮られているのだろう。

そう思われていたとしても、シルディアは何もかもが手のひらの上だと笑うオデルに一矢報いたく  
てしかたがない。

(でも、今はその時ではないわ)

「なにか企んでるね。楽しみにしとくよ」

「……そこまで分かかっていて止めないのね」

「シルディアがしてくれることなら、俺はなんだって嬉しいからね」

「オデルはわたしが剣を向けても喜びそうだよ」

シルディアはげんなりとした顔を向ける。しかしオデルはあっさりと頷いた。

「当たり前だよ。だって、それだけ俺のこと思ってくれたってことだし……。それに」

「それに？」

「その時だけは、シルディアの綺麗な瞳に俺だけが映るんだ。たまらないよ」

オデルは恍惚とした表情を隠さずさらけ出す。

顔色一つ変えなかった彼のその表情はわざとだろう。

「わたしの反応を見て楽しんでるでしょ」

「あ、バレた」

「そりゃあそんな露骨に表情が変われば誰だって分かるわ」

「シルディアが俺を見てくれる証拠だよ」

うっとり頬を染めるオデルに、シルディアは額に手を当てた。

「話を通じるのか、通じないのか分からなくなってきたわ」

「シルディアの紡ぐ言葉は一言一句聞き逃さないようにしているよ」

「聞いていても会話が噛み合っていないのよ！ もうっ」

ふんつとそっぽを向けば、オデルは少し慌てたようにシルディアを抱きしめてきた。

密着した胸からどとどとと早鐘を打っている音が聞こえる。

(意外。女慣れしてそうなのに、緊張しているのね)

「ごめん。嫌いにならないで。シルディアの反応が可愛くてつい意地悪をしたくなるんだ。シルディ

アが嫌ならもうしない」

「話を通じるようになるならそれでいいわ」

「うん。ごめんね」

ぎゅうぎゅうと抱きしめられ、肩にオデルの顔が埋められる。

肌におデルの髪が当たりくすぐったい。

彼の温かさがすぐく近い気がして、初めて気が付いた。

「ネグリジェのままだよ……！」

ドレスルームへと行ったというのに、オデルが流れるように部屋を移動したせいで今の今まで気が付かなかった。

「ちっ、気が付かなくてもよかったのに」

ぼそりと呟かれた言葉を拾い、シルディアは眉を吊り上げた。

「わざと教えなかったわね!」

「ドレスって着替えに時間かかるし、なにより侍女をつけなければならないから、いっそ、そのままでいてくれればいいなと思っただけだよ」

「それをわざとと言うのよ! ああもう。わたしの侍女選別は終わっているの?」

「……教えない」

「なんでよ!」

「教えたら着替えに行くでしょ?」

子どものような口調で呟かれる。回された腕に力が籠った。

(つまり選別は終わっていて、控えているのね)

言葉の裏に隠れた真実を読み取ったシルディアは仕方なく口を開く。

「オデルのために着飾ることも許してくれないの?」

「!」

オデルが息を呑んだのを感じ、シルディアは口角を上げた。

「残念ね。オデルがわたしのために誂あつらえたドレス、わたし一人じゃ満足に着れないし、化粧だってできないわ。困ったわね」

「そんな手には乗らない」

「あらそう。残念。わたしはもっと可愛く着飾った姿を見て欲しいのに」

「くっ……」

「だから、ね? ちゃんと侍女を紹介して。着飾る時間をわたしにちょうだい?」

「それは、反則でしょ」

肩に顔をうずめていたオデルはさらにぐりぐりと肩に顔を押し付ける。

そんな彼に勝利を確信したシルディアが、最後の一押しにとっこりと笑った。

「着飾ったら一番に来るから、待っていて?」

「っ、わかった。俺の負けだ。侍女を紹介しよう」

執務机に置かれた鈴を鳴らすと、一人の侍女が入室した。

「ヴィーニャだ。平民から登用したから、貴族のしがらみに囚われなと思う。それに一人でなんでもこなせるオールラウンダーだ。それとシルディアが妖精姫とは別人だと知っている」

頭を下げるだけで何も言わないヴィーニャをシルディアはじっと見つめる。

ヴィーニャは赤紫色に黒色を上塗りしたような髪と瞳をしていた。

紅消鼠べにけしねずみと呼ばれる色を持つ彼女は、ガルズアース皇国の国民なのだろう。

皇国の国民は皆、黒っぽい髪色をしているため、見分けが付きやすい。

その中でも漆黒の髪を持つのは皇族のみだ。

(皇族は高貴な黒竜の生まれ変わりだから、漆黒の髪を持つとされている。漆黒に近づけば近いほど爵位が高い傾向があるのよね。平民と言っていたけれど、どこかの令嬢と言われても納得できる)

疑問を口にせず、シルディアは笑みを作った。

「よろしくね。ヴィーニャ。早速なのだけど、着替えを手伝ってちょうだい」  
「御意」

洗練された貴族令嬢のように淑女の礼を行ったヴィーニャに、疑問はますます深まる。しかし、ドレスルームへと足を向けた二人にオデルが自分もとついてくる。

「俺も……」

「ついてきたら嫌になるから」

ドレスルームの前でオデルをあしらひ、シルディアはヴィーニャが開けた扉をくぐった。色とりどりのドレスが掛けられたそこは、妖精姫のドレスルームよりも品数がある。

案内された時は扉の外から中を覗き見たため気が付かなかったが、ドレスルームの中には数えきれないほどのドレスが並んでいた。

そのドレスの数は、一年間夜会を毎日開いても同じドレスは着なくても問題ないほどだ。

（むしろ、生涯で全て着れるか分からないくらいあるわ。とれだけ買ったのよ）

一着一着確認していたら日が暮れてしまいそうだ。

なにせ流行をおさえたドレスは魅力的な物ばかりで目移りしてしまう。

幸いなことに色で列が分けられているため、色さえ決めればそこまで時間はかからなそうだとシルディアは独り言ちる。

（赤いドレスがやたら多いのは、オデルの瞳の色だからね）

自身の瞳と同じ色のドレスを贈るといふのは、独占欲の表れだ。

自分のものと周りに知らしめるための行為。

（他にない特殊な色であればあるほど、誰のものかわかりやすい。赤色の瞳はどこを探してもガルスアース皇族しかいないもの。誰のものか明らかね）

着替える時間を渋々受け入れたオデルが満足する装いをしなければならぬ。

中途半端なドレスを選べば、今後二度とドレスに着替えさせてもらえないかもしれない。

そう考えてしまうほど、彼の執着は度を越えている。

「赤色のドレスにしましょう」

「かしこまりました」

「ええ。お願いね。オデルが満足できるくらい着飾ってほしいわ。頼りにしてる」

「！ はい」

無表情だったヴィーニャの紅消鼠の瞳が見開かれる。

しかしそれはほんの一瞬で見間違いかとシルディアは気にも留めなかった。

リビングルームの猫足ソファに腰かけるオデルに、ヴィーニャが声をかける。

「お待ちせいたしました。皇王陛下。つがい様の身支度が整いました」

「待ちくたびれた」

「しかたないでしょ。女の支度は時間がかかるものなのよ」

ヴィーニャの後ろから一步踏み出したシルディアは、オデルに声をかけた。

シルディアへ目を向けたオデルがルビーのような瞳が落ちそうなほどに見開く。それもそのはず。

彼への好意があまり感じられない言動をするシルディアが、彼の瞳と同じ真紅のドレスを身にまとっているのだから。

選んだのは真紅をメインに使ったドレスだ。

背中がぼっくりと開いたデザインで、背中から胸元まで細やかなレースがあしらわれている。

レースが映えるのはそれだけではない。

シルディアの腕を覆うのも、全てレースでできている。

幾重にも重なったドレープとタックは赤と橙のグラデーションを描き、まるで揺れる炎のように美しい。

首元で一際輝くのは大粒のルビーだ。

金色に輝く装飾品を脇役に添え、ルビーの美しさを引き出している。

余計な宝石を使わないこだわりの見える逸品だろう。

足を彩る靴は、踵が高い舞踏会用のパンプスだ。

気合いを入れた結果、ドレスに引けを取らないものを選んだら舞踏会用しかなかったのだから、仕方がない。

一つにまとめた白髪は、赤色のリボンで留められている。

両サイドは編み込まれており、凛々しさの中に可愛らしさをちりばめた出来になっていた。

閉口してしまったオデルに、シルディアは居心地が悪そうに身じろぎをする。

「何か言ったらどうなのよ」

「！ い、いや、なんて言ったらいいんだろう……。綺麗だ？ 美しい？ 可愛い？ いや、そんな言葉じゃ言い表せない」

「そこまで褒めちぎれとは言っていないわ」

「事実だろう。シルディア以上に美しい女性を見たことがない」

「言い過ぎよ」

「美の女神すら嫉妬して、シルディアを殺そうとするだろう」

大真面目な顔で言うオデルに、からか揶揄いの色は一切ない。

そのためシルディアの頬に熱が集まってしまう。

「そ、んな褒め殺しみたいな言葉……」

自身に送られる褒め言葉にたじたとするシルディアを横目に、ヴィーニャがオデルに耳打ちをする。

彼は迷いなく頷き、一言手配しろと命令した。

ヴィーニャが彼の命令に応えるべく、礼をして退室した。

「さて。シルディア」

誰もが見惚れる笑顔を浮かべたオデルが立ち上がり、シルディアの手を取る。

「こんなに着飾って、本当に俺を喜ばせたかっただけ？」

「っ!？」

「そんなに外に出たい？ でも俺は、こんなに可愛い君を他人の目に触れさせたくないな」

「……全部お見通しってわけね」

「シルディアは可愛いね。わかりやすくて」

「それは褒められている気がしないわ」

「うん、褒めてないからね」

にっこりと笑うオデルが、シルディアの背に手を這わす。

ピクリと大きく肩を揺らしたシルディアの反応に満足したのか、彼の手はさらに背をなぞる。

「あ、本当だ。妖精姫の体形に合わせたのか。少し胸回りがきついな」

「!？」

「大丈夫。明日には全てシルディアの体形に合ったドレスが並んでるよ」

「は、え、待って？ それって針子を一晚中働かせるってこと……？」

「？ 問題が？」

「大ありよ。そんなつがいでもないわたしなんかのために寝る間も惜しんでやらなくてもいいの！」

「今、なんて言った？ 『わたしなんか？』」

背を這っていた手がシルディアの腕を掴む。

「痛っ」

握り込まれた腕が悲鳴を上げる。

痛みをこらえ、オデルの顔を見上げた瞬間。

シルディアは室内の温度が下がったような錯覚に陥った。さながら蛇に睨まれた蛙<sup>かわず</sup>だ。

室内は暖炉のお陰で暖かはずだというのに、シルディアの足元から寒気が上ってくる。

「俺の大切なシルディアのことを悪く言うのは、たとえ本人でも許さない」

「そ、そんな理不尽な……」

「じゃあもっと自信を持って」

「わたしに、誇れるものなんて、なにも……」

「シルディアは優しい女の子だよ」

言い切ったオデルを見れば、全てを凍らせてしまいそうな視線はもうなかった。

「王族なら城の針子に対して、一晚中働かなくてもいいって言ったりしない。それは、シルディアが

優しいってことだよ」

「誰だって不眠不休で働くのは嫌よ」

「貴い身分の人間はそんなこと気にしない。心優しいシルディアのいいところ」

「……そんなこと、初めて言われたわ」

「王族らしくないって言われてた？」

「そうね」

シルディアの腕を掴んでいた手を離れたオデルが、彼女の頭を撫でる。

オデルはわが子を眺めるように目を細め、口を開く。

「俺はそんな王族らしくないシルディアを欲したんだ」

「わたしとオデル、会った回数は何回じゃない」

「その数回で俺を虜にしたのはシルディアだろ？」

「冗談……」

吸い込まれそうなほど綺麗な赤い瞳に、シルディアは息を呑んだ。

オデルの目には、一切の偽りが無い。

本気でそう思っている人間の顔だ。

「自信をもって。皇妃となるのはシルディアなんだから」

「わたしはつがいじゃないって、さっきも……」

「つがい、つがいって、そんなに俺のつがいが気になるの？ 仮にシルディアがつがいでなかったとしても、認めさせるから安心して」

「そんな、前例のないこと許されるわけない」

「大丈夫」

「皇妃はつがいでないかと認められず、皇王は錯乱して崩御してしまうって」

「うん。事実だね」

「だったら！」

「ここまで知っていて、なんで気が付かないの？」

「何に……？」

言葉の意味が分からず首を傾げるシルディアに、笑みを深くしたオデルが呟く。

「俺のつがいは君だよ。シルディア」

「……え？」

「妖精姫の出席する夜会に何度か参加して気が付いたんだ。俺が恋い焦がれてやまない存在とそうでない存在が入れ替わっているってね」

「っ、つまり、オデルはわたしだと知った上で、求婚したってこと？」

「そうだよ」

「フロージェが嫁いで来たらどうしていたの？ つがいでなければ死んでしまうのに……」

「妖精の国が、妖精の祝福を一身に受けた姫を他国に渡すわけないだろ？ シルディアが来ると確信していたよ」

困惑を隠せないシルディアの頬をオデルが撫で、耳元に唇を寄せ囁く。

「だから、ね？ 俺がシルディアだけを愛してるってわからせてあげるから、早く自覚してね」

チークキスのように頬と頬を合わせてから離れたオデルは獲物を捕らえたような目をしていった。